

岩国反基地集会でのプレゼンテーション（2016年12月10日）

ミグランテ日本支部

こんばんは。米国の軍事プレゼンスに対して不屈にたたかっていることに対して、岩国およびその他の日本の人々に、最も戦闘的な連帯のあいさつを送らせてください。

25年前、フィリピン民衆は米本土以外で最大の二つの米軍基地—クラーク空軍基地とスービック海軍基地—の撤去を勝ち取った。勝利をもたらしたのは、私たちが数十年にわたって行ってきた集中した努力だった。このたたかいに勝利するために私たちは多くの命を犠牲にした。そして、フィリピン民衆のこの歴史的な勝利から私たちが学ぶことができるひとつの教訓があるとすれば、それはおそらく闘争自体の真実性と正義性であり、戦闘性、忍耐、そして議会からマニラ、パンパンガ、サンバレスの街頭に至る様々な戦線、国内的、地域的、世界的な戦線から行われてきた抗議行動と結び付けた絶えまない教育・宣伝活動を通して大衆運動を広範につくることの重要性だ。フィリピン民衆にそれができたとすれば、日本の民衆も必ずそれができる！

しかし、この歴史的な勝利を前にしてさえ、我々はアメリカ帝国主義が、将来いつか舞い戻ってくるために一公然あるいは隠然と一なしうるあらゆることをするだろうことを知っていた。結局、我々は帝国主義がいかに振る舞うかを知った。帝国主義はそれが望むものを手に入れるまで、あらゆることをしてくる。そして悲しむべきことに、その経済的、政治的、文化的、軍事的な暴虐の標的とされるのは、常に第三世界の民衆、貧しく、疲弊し、搾取された開発途上国あるいは低開発国の民衆なのだ。

実際、米軍基地はなんとかフィリピンの地から去ったが、それを復活させようとする国内外の試みはきわめて明白だった。国内の傀儡と共謀して、官僚資本家と大地主で構成されるエリートの寡頭政治家—少数のフィリピン人からなる反動的支配階級—は、我々の中に基地を舞い戻らせようとするあらゆる手段を使った。コリー・アキノから彼女の息子のベニグノ・アキノに至る過去のすべてのフィリピン共和国大統領は、軍事基地の回帰はフィリピン経済を復活させ、フィリピンの国家主権に対するあらゆる脅威を抑止するために必要なことだと懸命になってフィリピン民衆を納得させようとした。彼らは皆、アメリカ帝国主義のフィリピンにおける疑いなき支配を擁護しようと画策してきた。

フィリピンにおける米軍基地の撤去以来、これまでの政府はフィリピンに米国の軍事プレゼンスを再びもたらす新たな協定を確立する方法を追求してきた。1998年にフィデル・ラモスが調印した訪問軍協定（VFA）は、米軍がフィリピン国軍と一時的な合同演習・合同訓練を行うことを認めた。この協定はその後に続くエストラダ、アロヨ、アキノ政権によって引き継がれた。アキノは実質的にフィリピン全土を米軍基地とし、米軍のプレゼンスをより強力なものにする防衛協力強化協定（EDCA）にも調印した。

議論になっていないが、アキノ政権はまさに日本が第二次世界大戦後の非軍国主義的な立場を捨てて再び軍事国家になろうとしていた2015年に日本との間での防衛・安保協定に調印した。今日、EDCAおよび日本とフィリピンの間で調印された防衛・安保協力協定は、フィリピンにおいて復活した反基地・反帝国主義運動に立ちはだかる二つの深刻な問題となっている。

2016年になって、ロドリゴ・ドゥテルテという名の新しい大統領が誕生した。彼は自分は「左翼」だと主張する。彼は自らの反米の姿を見せたがっているが、必ずしも反帝国主義者ではない。彼は契約労働（注・非正規労働）の廃止などいくつかの積極的な主張をし、フィリピン民族民主戦線との和平交渉に関わっている。

しかし、その反米の姿勢の裏で、ドゥテルテ大統領は反動的な支配エリートの代理人であり続けている。彼はどうすれば大衆や財界・政界の彼の仲間からの支持を引き出すことができるのかを知っている伝統的政治家だ。彼は反米であるかもしれないが、必ずしも反帝国主義ではなく、明らか反日本帝国主義、反中国帝国主義ではない。実際、彼はその両帝国主義との経済関係・友好関係の深化に熱心だ。それゆえ、誰が彼を反帝国主義と言っているのか？彼はそうではない！

最近の日本訪問で、彼は経済だけでなく、防衛・安保問題に関しても、フィリピンと日本の結びつきが強まっていることを強調した。彼はアキノ前政権の下でフィリピンと日本との間で調印された防衛・安保協定の追求に熱心だ。我々はごく近い将来に合同軍事演習を口実にして日本の自衛隊がフィリピンに出入りしたとしても驚かない。我々はもうひとつの訪問軍協定（VFA）がこの二国間で締結されたとしても驚かない。さらに我々は、政府と民族民主戦線との間の和平交渉が失敗に終わったときに対反乱作戦に日本の自衛隊が直接に関与したとしても驚かない。

では、我々はそれらのことを想像しているだけか？—否！それらはすべて我々反基地・平和活動家が警戒すべきありうるシナリオなのだ。

ドゥテルテ政権下での独立外交政策は、不安定なものである。百年間にわたってフィリピンが外国勢力の植民地であったがゆえに、それは簡単なことではない。最初はスペインの植民者が、続いてアメリカ、第二次大戦期には日本、その後はアメリカと、彼らは我々を離さなかった。そして、ドゥテルテ大統領は、それを忘れた指導者ではない。彼は自らの対麻薬戦争に対するあらゆる批判ゆえに米国に起こっているかもしれないが、まさに前任者と同様に、アメリカン・ボーイであり続けている。彼はこれまでの政府と同様に、経済、政治、文化、軍事のすべての分野においてフィリピンを支配している支配エリートを代表しているがゆえに、彼の大統領としての地位に利益となることはすべて、それが米国であれ、ロシアであれ、中国であれ、日本であれ、どこから来ても、この政府に歓迎される。

比米関係は米軍基地の関わるストーリーと並行してきた。クラークとスービックは撤去されたが、それらを回帰させる考えが復活し続けてきた。アメリカもまた帝国主義国としてそのように考えてきた。1945年にフィリピンに独立を与えた後、フィリピン人は米国の陰で暮らし続けてきた。我々は、我々につきまとい続ける米国とともに生活し、息をし、死ぬ。アメリカ帝国主義は単純に我々を手放したりしなかった。

それゆえ民衆の闘争は続いている。正義と恒久平和のためのたたかいはフィリピン民衆にとって生きるか死ぬかのたたかいだ。我々は帝国主義、主にアメリカ帝国主義と闘い続けている。なぜなら、我々はそれがフィリピン民衆にとって最大で最も深刻な問題であると考えているからだ。国内の寡頭政治家、官僚資本家、国中に膨大な農園を所有する極悪の大地主と共謀して、帝国主義は我々の資源を収奪し、我々民衆を搾取している。帝国主義は我々民衆の最大の悲惨の源だ。我々はそれを止めなければならない。我々は帝国主義を打ち倒さねばならない！

そして、そのあらゆる形態において米軍基地は我々の国の中にある帝国主義の象徴だ。それらの基地は我々に、帝国主義の力がどれほど強く、我々民衆がどれほど絶望的かを絶え間なく思い起こさせている。そうした基地は民衆にとっての平和と主権への我々の追求の中に場所はなく、我々はそうした基地が出ていき、二度と戻って来なくなるまでそれらを拒絶しなければならない。ドゥテルテ政権はやがてその隠された姿をあらわにするだろうし、我々は彼がフィリピン民衆ではなく、帝国主義の側に立つだろうと考えている。我々は現在、我々が手に入れた限定された空間のなかで我々のピープルズ・アジェンダ（民衆の政策要求）を推し進めようとしている。和平交渉と独立外交政策の追求は、フィリピン民衆にとっての真の課題を実現するために我々が最大化し活用しなければならない二つの関与の領域だ。

それゆえ、帝国主義の悪とそれを代表する象徴に対する我々のたたかいは続くし、我々の民衆の未来の世代を鼓舞するものでなくてはならない。我々はすべてのフィリピン人と人類全般の自由、正義、繁栄を伴う社会という我々の理想を実現するために、懸命になって民衆を目覚めさせ、組織し、立ち上がらせねばならない。

同志の皆さん、帝国主義がもはや我々の怒りと抵抗に耐えられなくなるまで、我々の闘争を築き上げ、人と人との連帯を強化しよう。

そして、フィリピン民衆のたたかいを共有する日本の民衆に対して、我々はすべての日本人が正しく報われる社会を築くためのあなた方のすべての努力に敬意を表する。我々は皆さんのたたかいの中で皆さんと共にある。なぜならば、我々は皆さんが我々のたたかいの中で我々と共にあることを知っているからだ。これが連帯の精神であり、帝国主義がいかに我々民衆を納得させようとし、だまそうとしても、決してそれを実現することができないところのものだ。

我々の反基地闘争は反帝国主義闘争だ。我々が我々の地からすべての外国軍基地の撤去を望むならば、我々はすべての帝国主義をきっぱりと終わらせるためにさらに懸命にたたかわなくてはならない。帝国主義の打倒は、軍事基地が我々民衆にもたらしている悲惨から我々を解放するだろう。

アメリカ帝国主義を打倒しよう！

日本帝国主義を打倒しよう！

アジアにおける米国およびその他の外国軍の基地に反対！

帝国主義を打ち倒そう！

民衆のたたかいを拡大しよう！

団結した民衆は決して負けない！

国際連帯万歳！